
鳥籠の妖精と夜話の侯爵

坂上ジュンヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥籠の妖精と夜話の侯爵

【Nコード】

N5053P

【作者名】

坂上ジュンヤ

【あらすじ】

高い高い塔の上、安穩と過ごす半分妖精の少女と、その養い主の侯爵。まるで永久に続くかのような同じ毎日に、ある異変が飛び込んできく。――前3作、「あかのおうじさま」「はくぎんのよげんしゃ」「てんじょうのうたひめ」を先にお読みいただくと少し分かりやすくなるかもしれません。単品でも読めるようになるべく考えてはいくつもりですが…。

プロローグ ある地方の昔話

深い深い森の奥。

高い高い塔の上。

昔話に語られる、恐ろしい化け物が住んでいる。

その声を聞いてしまったら、たちまち動けなくなつて、

食べられてしまうのだと、大人たちは子どもに語りかける。

だから、森に入つてはいけないよ。

だから、怖い塔には近づいてはいけないよ。

ある親が、そのまた親から伝えられてきた、古い古い昔話。

もう、誰も本当のことは分からないほど、昔からあるお話。

あの塔の上には、とてもとても恐ろしい化け物が住んでいる。

子どもが近づこうものなら、

あっという間に塔に捕まつて、

二度と出ては来れないんだよ。

ある子どもが、そのまた子どもに伝えていく、長い長い昔話。

ホントかウソかもわからない、昔からあるお話。

けれどその化け物は、確かにそこに生きている。

（一） 夜の蜜月

（一）

とん、とん、とゆっくり階段を上る音がする。

レンガ積み of 緩やかにカーブする壁に沿って作られた階段を、一人の男がゆっくりと登っていく。

男はどこか高貴な印象を与える服装をしていた。

膝ほどにまであるコートは質の良いびろうどで出来ていたし、胸元を飾るスカーフはシルクの艶を放っていた。

しかしながら、男の髪は貴族らしくもなく、ずるずると伸び放題だった。

その伸びきった髪をうなじの所で纏めてはいるものの、顔の大半は髪に隠されてしまっていた。

それでも男は、まるで夜を絞って染めたような深い黒の髪の奥、白い肌に赤い瞳がよく映える、美しい相貌をしていた。

男は左手に革装丁の分厚い本を抱え、右手に蠟燭を持っている。

暗い階段通路はその蠟燭の明かりを以てしても、曖昧な輪郭しか晒さない。

男はそのわずかな明かりの中をゆっくりと移動していた。やがて、小さな踊り場と、その向こうにある簡素な扉で

長い長い階段は終わった。

男は蠟燭を傍らの明かり台に置くと、

その木の扉をこんこん、と優しく叩いた。

すると、ゆっくりと木の扉が開き、男の膝辺りほどの身長 of 少女の人形が顔を出した。

何処にも操り糸は見えないが、人形は男を見上げると、一つお辞儀をした。

男は人形に微笑みを返し、

「やあ、ダイナ。今日も問題無いね？」

と語りかける。

するとダイナと呼ばれた人形はぴよこん、と頷き、

男を招き入れるように扉を開いた。

男がそれに従って部屋の中に入ると、

夕陽の残光が深く残る部屋の中、

ベッドに腰掛けて薄い絵本に目を落としていた少女が、顔を跳ね上げた。

部屋の入口に男の姿を認めると、ひどく嬉しそうに笑い、抱えていた本をベッドへ投げ出して、すぐに男の元に駆け寄った。

そして柔らかな栗色の髪を揺らしながら、

実に無邪気に男に抱きついて、かるやかに弾む声で言った。

「こんばんは、アルベール！待ってたわ！」

その栗色の髪を優しく撫でると、アルベールと呼ばれた男は、自分の腰元まで程しか背のない小さな少女を抱き上げた。

そして少女の顔を覗き込むと、

「ああ、こんばんは、リチエ。今日も変わりないかい？」と、優しく問いかけた。

その少女の背には、わずかに残った夕陽を反射する、美しいフィルムを貼り合わせたような小さな羽根があった。

少女はその小さな羽根を嬉しそうに震わせながら、

男の首にしがみついて、

「問題無いわ、ダイナもいるもの」
と答えた。

するとダイナも、それに応じるように小さく跳ねた。

アルベールは一つ微笑んで、少女をベッドに下ろすと、自分もその傍らに腰を下ろした。

その部屋に唯一作られている窓の向こうでは、すっかり日は山の向こうへ沈み、空は濃紺に染め上げられている。

部屋全体を薄ぼんやりと、照らすランプの明かりの中、リチエはベッドの上で座り直し、

アルベールの手元にある厚い本を嬉しそうに覗き込んだ。

「ねえねえ、アルベール。今日のお話はどんなお話？」

アルベールはそんなリチエの頭をもう一度優しく撫でると、少し悪戯っぽく微笑み、

「そうだね。最近少し暑くなってきたから、少し怖い話をしようかと、本を開いた。」

「怖いお話？」

リチエが少し首をすくめてアルベールを見上げた。

アルベールはリチエを安心させるように少し微笑んだ後、

「大丈夫、お話の中のことさ」と続けた。

そしてアルベールは紙に刻まれた文字に目を落とし、

ゆっくりと話を読み上げ始めた。

その声はそれまでの会話で交わされた声とは異なり、

まるで脳に直接響いて、像を結ばせるような、魔性の響きを持っていた。

それは、一人の若者の話。

夜の闇によって化け物に変わってしまう、不幸な若者。

若者は、綺麗な歌姫に恋をした。

けれど若者と歌姫では、生きる世界が違った。

だから若者は、歌姫から声と光を奪って、とうとう歌姫を手に入れた。

若者は幸せそうに笑う。
まるで本物の化け物の顔で。
これは一人の化け物の話。
すべてを奪い取って歌姫を手に入れた、
とても恐ろしい化け物の話。

アルベールの口からその物語が紡がれ終わると、
リチェは少し首をすくめたまま、眉を寄せて呟いた。

「…歌姫が、可哀想だわ」

アルベールはそんなリチェの髪を優しく撫で、少し微笑んだ。

「そうだね。歌姫は、昼の若者に騙されてしまったのかな？」

「そうよ。本当に好きなら、夜の醜い姿こそ愛してほしいものじゃないかしら」

アルベールはそれを聞くと、

「夜の姿を…醜い姿、恐ろしい姿をさらすのは、とても怖いものだよ」

と寂しそうに説いた。

リチェはそんなアルベールを見上げて、

「アルベールも、見せたくないことがあるの？」

と、不安げに問うた。

「…いいや？だってほら、お外はすっかり夜だけれど、私は化け物になんかなくてないだろう？」

アルベールは優しく微笑み、片手を振って見せる。

リチェがそれを見て、安心したように、

「そうね。アルベールは化け物なんかじゃないものね」と微笑んだ。

アルベールは

「もちろん」

と返すと、少し真面目な顔になってリチエに語りかけた。

「でも、リチエ？例えば、万が一他の誰かに会っても…

昼の顔はいくら良い人でも簡単に信じちゃいけないよ。

…夜に怖い顔を持つている奴ほど、隠すのがとてもうまいんだ。

君は特に、貴重な妖精の血が流れてる。それを利用しようと、

君を捕まえようとする人間は、たくさん居るんだ。」

その言葉にリチエは首をすくめ、アルベールの服の裾をギュッと握りしめ、

「でも、アルベールと一緒にいれば、平気なんですよ？

そんなに怖いことばかりのお外なんか、行かなくて良いもの」と、呟いた。

アルベールはそれに小さく微笑むとリチエの髪を優しく撫で、

「さあ、月ももうすぐ沈むね。おやすみ、リチエ」

とリチエの額に優しく口づけた。

長い語り聞かせの中、すっかり過ぎ去っていた時間は、もう夜明けにかかるうとしていた。

厚手のカーテンを降ろし、アルベールは扉の方へ向かう。

「おやすみなさい、アルベール。また夜に」

夜具の中に潜り込んだリチエは、少しだけ掛け布団から顔を出し、小さく囁いた。

「ああ、おやすみ、リチエ」

アルベールは柔らかにそう言い残し、部屋を後にした。

(三) 昼の出会い

太陽が一番高い所を少し過ぎた辺り。

リチエが目をこすりながら、窓を覆う厚手のカーテンを開けた。

「良いお天気ね。」

ダイナが着替えと、軽い食事を運んでくる。

リチエはそれを受け取ると、目を擦りながら着替えと食事を済ませた。

空き皿と服をダイナが部屋の外へ運んで行くのを見届けながら、リチエは窓を開けて、吹き抜ける風に目を細めた。

抜けるような青空の向こう、ちらり、と何か黒いものがちらついた気がして、

リチエは目を擦った。

「…鳥さん…？」

よく見ようとリチエが目を凝らしている間に、どんどん黒い粒は大きくなり、

不安定な軌道を描いて塔へ向かってくる。

危険を感じてリチエが窓から離れた瞬間、

ひゅん、と風を切って、何かが部屋の中へ飛び込んできた。

その何かは壁にぶつかり大きな音を立て、床へ落ちた。

「…？」

リチエが恐る恐るその何かに近付くと、何かはがばっと起きあがった。

「いつてえええー！」

飛び込んできた何か―箒を握りしめた少年は、頭を押さえながら辺りを見回す。

「…ん？ここ、何処だ…？」

「…だ、だれ…？」

リチエが恐る恐る問うと、少年は安心したように微笑んだ。

「良かった、人が居たよ！ねえ、ここ何処？」

いやあ、俺さあ高く飛ぶのは得意なんだけど、いまいちコントロールが悪くて」

少年が怒涛のように話していると、部屋の入り口からダイナが駆け込んできて、

少年とリチエの間に割って入った。

ダイナがリチエを守るように立ちはだかると、少年はダイナをまじまじと見つめた。

「…これ、人形だね？どんな仕掛け？」

少年がダイナに手を伸ばすと、ダイナは少年の手を跳ねのけて、敵意むき出しの様な仕草を取る。

少年はそれを見て少し考え込むと、一つ頷いて姿勢を正した。
「そうだよねえ。見ず知らずの奴は警戒しといた方がいいね。」

じゃあ、自己紹介だ！俺はエルゼガードⅡカルケット。

この近所の村に住んでる魔法使い。」

ぺこり、と頭を下げた少年、エルゼガードを見て、リチエも思わず頭を下げた。

「君は？」

につこり笑うエルゼガードに、リチエも少し微笑み返し、

「リチエ。…この子は、ダイナ」

と、名前を名乗った。

エルゼガードはそれに満足そうに笑うと、部屋の中を軽く見まわし、
「ここ、きみ一人で住んでるの？」

と尋ねた。

リチエは首を振り、答える。

「うっん、アルベールと一緒に。あと、ダイナも一緒に」

「ダイナは…その子だよ。アルベールって？」

「アルベールは、アルベールよ。夜になると、お話をしにきてくれるの」

エルゼガードは少し首をかしげて、

「ふうん…お父さんかお兄さん…みたいなものかな」

と自分だけに聞こえるように呟きました。

そしてすぐにリチエに笑いかけるとまた問います。

「こんな塔の上だけど、生活は大丈夫なの？」

「うん、ダイナがご飯もお洋服も運んできてくれるから…」

「その…アルベールは来ないの？」

「うん、アルベールは夜だけ」

アルベールの話を安心したように語るリチエを見つめながら、

エルゼガードは不審げに眉を寄せた。

「…そう」

「ねえ、エルゼガードは魔法使いなのよね？」

「えっ？あ、ああ」

思案に沈みかけたエルゼガードは唐突に振られたリチエの声で、驚いたように顔を上げた。

「エルゼガード、お空を飛んできたわよね？アレも、魔法なの？」

興味深げに問い続けるリチエに少し笑い掛け、

エルゼガードは答える。

「そうだなあ、箒に魔法をかけて、飛べるようにしたんだ。だからこれも魔法かな。」

「ねえ、それじゃあ、お外って怖い人がいっぱいいるってホント？」

「そんなことないよ。悪いやつもいるけど、それよりもたくさん、良いやつもいるさ」

「ねえねえ、それじゃあ、それじゃあ」

「ちよ、ちよっと待って！そんなに色々聞かれても困るって！」

矢継ぎ早に聞こうとするリチエをエルゼガードは苦笑しながら抑える。

すると少し唇を尖らせたリチエはくるっと踵を返して窓を閉める。

その背中の中の羽根を見て、エルゼガードは目を丸くした。

「リチエ、その、背中の中の羽根…」

リチエはその視線に慌てて背中を隠すようにすると、

「こ、これ、これはね。えっと…」

と言い繕おうと言葉を探した。

エルゼガードは慌てるリチエの手を取り、目を輝かせる。

「もしかして、妖精の血が流れてる子って君のこと!？」

リチエはそれに驚いて少し怯えながら頷いた。

エルゼガードは益々嬉しそうに笑って、

「すごいや…。もう世界に何人もいないって話なのに、こんな所で会えるなんて!」

と続けた。

リチエはその言葉に益々怯えて、首をすくめた。

「…エ、エルゼガードは、妖精の血が、気になる?欲しい?」

びくびくと言葉を紡ぐリチエを見て、エルゼガードは慌ててリチエの手を離れた。

「あ、ごめん…。そりゃあ、魔法使いとしては、

妖精の血を持つ人間っていうのは気になるもんだけど…。

…ああごめんって!そんなにビビらないですよ!

羽根むしり取ったりなんかないから!」

「!!!」

「うわ、ごめんまた俺変なこと言った!……怖がらないですよ。

リチエはリチエだろ。ちゃんと意思のある女の子に

無理強いするほど俺、落ちぶれてねえし…」

「…ご、ごめんなさい…」

しゅんとするエルゼガードに、リチエも少しすまなそうに謝った。

「…じゃあ、エルゼガードは、悪い人じゃないのね?」

おずおずとリチエがそう問うと、エルゼガードは少し胸をそらして、

「当たり前だろ!」

と言い切った。

リチエはその言葉に緊張していた顔を崩すと、息を吐いた。
そしてすぐに目を輝かせて、エルゼガードを覗き込んだ。

「それじゃあ、お外のこと、聞かせてほしいの！」

お化けや怖いものがいっぱいなの？それとも、お菓子の家がたくさんあるの？」

「そうだな…さっき怖がらせちゃったお詫びも兼ねて…俺でよけりや、教えてあげるよ」

リチエはその返事を聞いて、花が咲くように笑った。

やがて、たくさんの質問とその答えが飛び交ううちに、高い所にあつた太陽は、山の端に消えようとしていた。
夕陽に気付いたエルゼガードは、慌てて箒を構えると、

「ごめん、もう行かないと！暗くなると森も危ないから…。
なんだったら、また来てもいい？」

と尋ねた。

リチエは微笑んで、

「うん、お外のこと聞かせてくれるなら」
と答えた。

エルゼガードはその答えに満足そうに笑うと、

「ありがと、それじゃ！」

と、足早に窓から箒に乗り、飛び去った。

それからしばらくして、こんこん、と優しく扉を叩く音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5053p/>

鳥籠の妖精と夜話の侯爵

2010年12月25日13時43分発行